

4 後一条天皇 六半切(橋姫)

後一条天皇(一二八五〜一三〇八)は、後宇多天皇の第一皇子。後伏見天皇退位の後即位した大覚寺統の天皇。早世したため治世はわずか七年だったが、歌会の開催など文化面での活躍が著しく、そのためか伝称筆者とする断簡が少なくない。

本断簡には古筆分家二代了任の極めがある。『新撰古筆名葉集』には「六半 源氏哥二行書」とあるが、ツレがいまのところ見出せていない状況のなかでは、本断簡に相当するか否か不明。

大きさは、縦一五・八センチ、横一五・三センチ。字高約一三・五センチ。一面一〇行書き。もと六半形の冊子であった。

内容は橋姫の巻頭ちかくの春の一日、水鳥の姿によそえて妻を失った悲しみをいう八の宮に、大君も憂き身を唱和する場面である。別本以外は異同の少ない箇所であるが、末尾一〇行目「はちら(ひて)」とあるべきところ、三条西家本・河内本「はちらひて」とあり、本断簡は定家本の本文と見なしてよからう。

(横井)

たれとさてしもあてになまめ

きてきみたちをかしつき給

御ころはへになをしなへは

みたるをき給てしとけなき

御ありさまいとはつかしけなりひ

めきみ御す、りをやをらひき

よせて、ならひのやうにてかき

ませ給をこれにかき給へす、り

にはかきつけさなりとてかみ

たてまつり給へははちら

『源氏物語大成』一五二頁⑥〜⑨

5 後醍醐天皇 六半切(柏木)

『新撰古筆名葉集』の後醍醐天皇の項に、吉野切や香具屋切と並んで、「同(六半) 源氏」という記述が見える。これに該当すると思われる切を紹介する。

大きさは縦一四・七センチ、横一〇・三センチ。全文は七行であるが、ツレの切に徴してみると、一面一〇行というのが、本来の形であったかと思われる。

柏木の巻の、病の床に臥せっている柏木を聖が加持祈禱する場面。書写年代は鎌倉の末期といったところであろう。本文系統は、断簡一行目「たつねめて」が大島本では「たつね」、同じく「ひしり」が「このひしり」、二行目「いとあら、かに」が「あら、かに」、三行目「たらによむ」が「おとろくしくたらによむ」、同じく「あなにくや」が「いてあなにくや」といった次第で、異同が少なくない。そして、これらの異同の中には、国冬本や保坂本・御物本など別本と一致するものがあるのは、注意されよう。

『古筆学大成』には、後醍醐天皇の六半切の源氏が二種類収められているが、そのうち、『古筆学大成』が(二)と分類した三葉が、掲出切とツレの関係に当たる。

(田中)

さまにたつねめて給なりけりひし

りたけたかやかにを。とろくしくいと

あら、かにたらによむをあなにくや

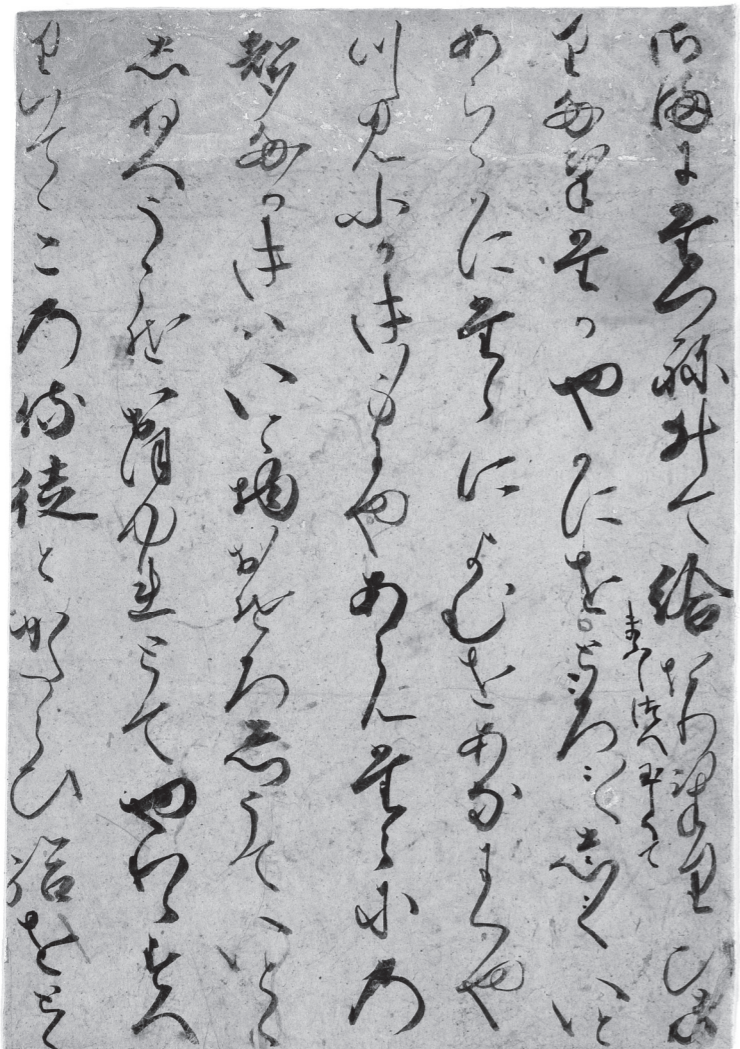
つみふかき身にやあらんたらにの

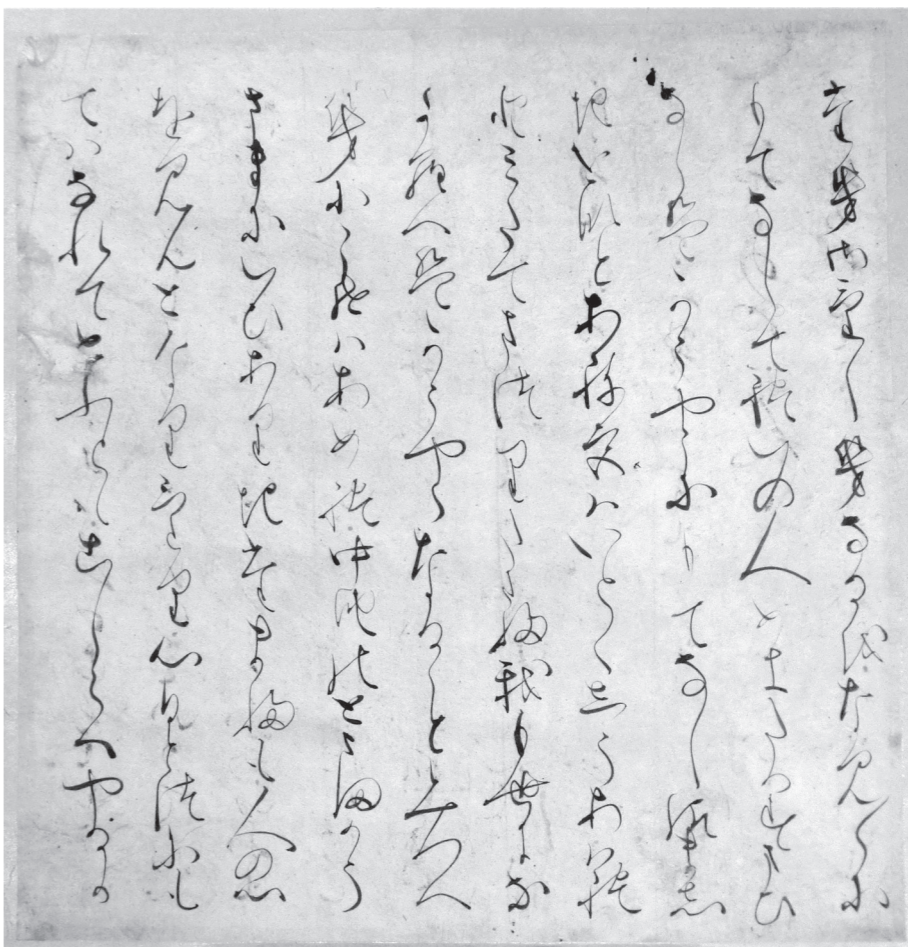
声たかきはいと物おそろしうていと、

しぬへうこそおほゆれとてやわらすへ

りいて、この侍従とかならひ給をと、

『源氏物語大成』一三三〇頁④〜⑧





6 後醍醐天皇 六半切(総角)

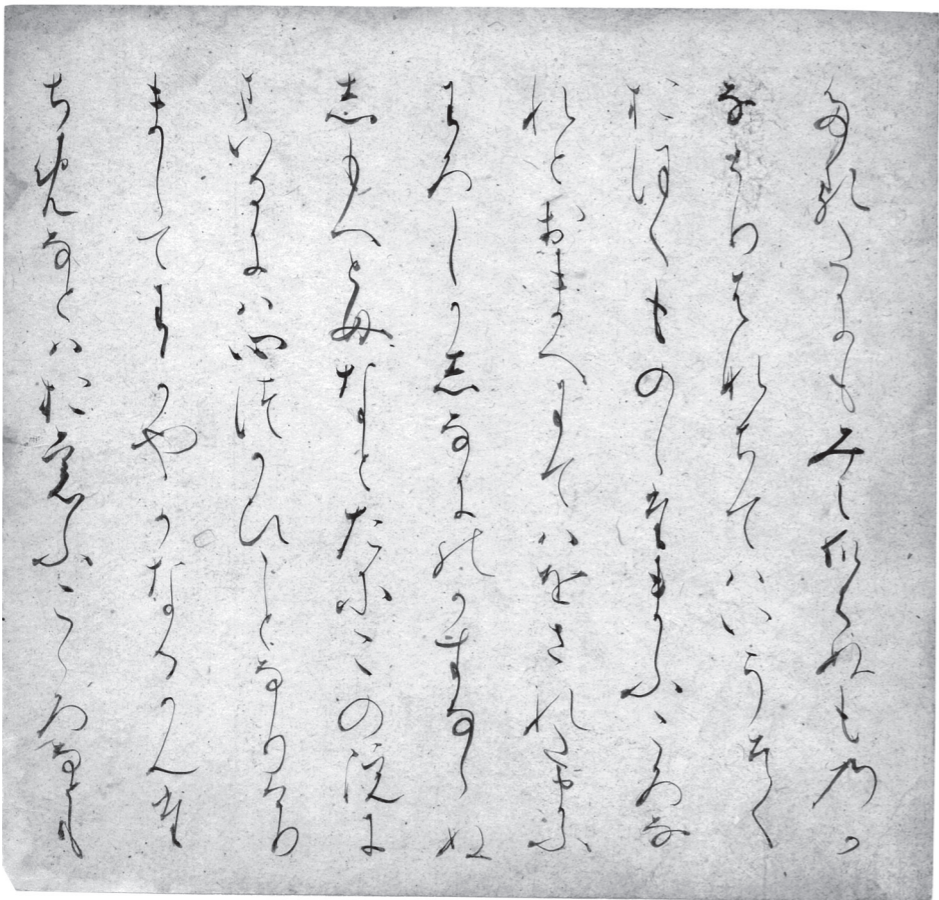
前項「5」のごとく後醍醐天皇を伝称筆者とする切は肉太の力強い書体のものが比定されることが多いが、本断簡は異質。

縦一五・二センチ、横一四・六センチ。一〇行存。

内容は総角の巻、中の君への仕打ちをめぐって匂宮や薫の態度を大君は恨み、自らの結婚拒否の気持ちをますます募らせるといふ場面。一行目「なみくに」は別本の横山本・平瀬本と同じく、定家本・河内本は「人なみくに」、別本の保坂本「人くなみくに」。一〇行目「とふとも」は独自で、定家本・河内本「おもふとも」、別本の横山本「おもふこ、ろも」、平瀬本「思らん」とあり、「と」は「思」の誤写の可能性もある。総じて別本の本文か。(横井)

たき御けしきなるをなみくに  
もてなしてれいの人めきたるすまひ  
ならはかうやうにもてなし給まし  
きをなとあね宮はいと、しうあはれ  
とみたてまつりたまふ我も世にな  
からへはかうやうなることみつへ  
きにこそはあめれ中納言のとさまかう  
さまにいひありきたまふも人の心  
を見んとなりけり心ひとつにも  
てはなれてとふともこしらへやるか

〔源氏物語大成〕一六四一頁④〜⑧



7 崇光天皇 六半切(初音)

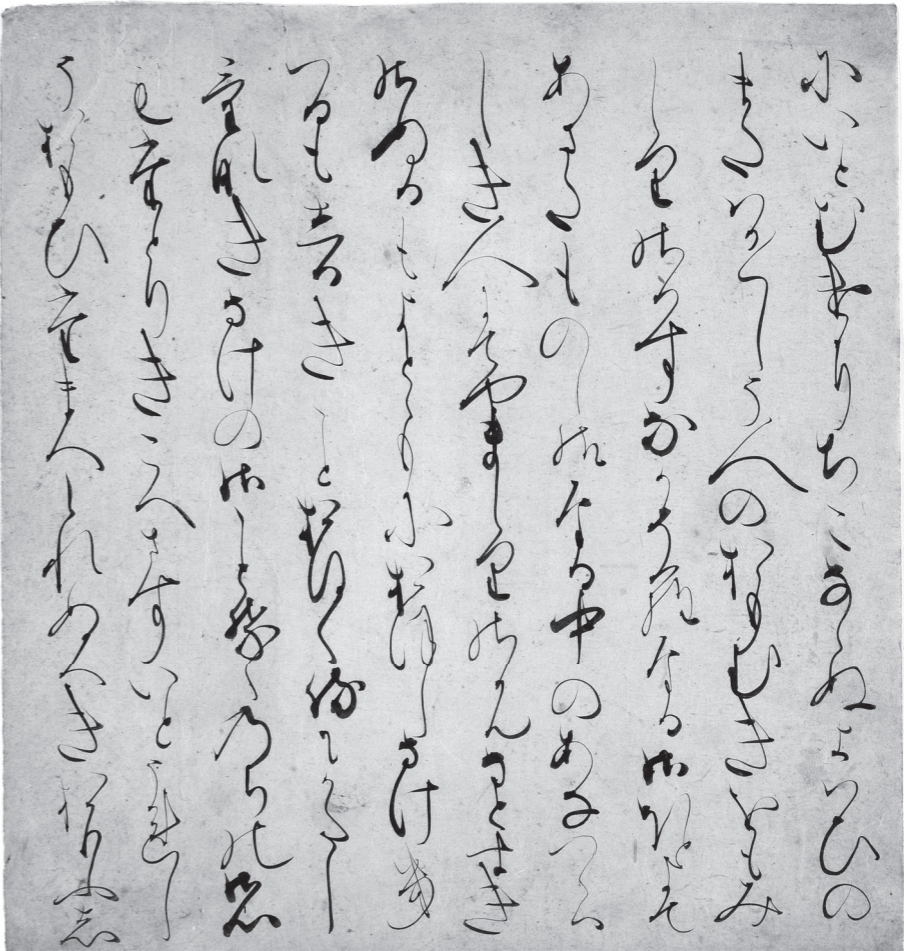
南園文庫蔵。

斐紙。縦一五・九センチ、横一六・六センチ。九行。字高約一四センチ。

初音の巻、六条院臨時客に集まる人々の批評。一行目「たるたにも」は諸本「たるたに」に作り、別本の異文と一致する。四行目「をされたまふ」九行目「こ、ろなとも」は掲出断簡の独自異文であり、にわかには本文の所属を定めがたいが、別本か。九行目「ちめなと」の「なと」は何かを磨り消し、書き改めている。書風は伏見院流伝称筆者崇光院(一三三四〜一三九八)の筆跡ではないが、ほぼ同時期の書写と見られる。「11」後光厳天皇六半切がツレか。朝倉茂入の極札あり。(高田)

たるたにもみえ給はぬものか  
なとりはなちてはいうそく  
おほくものしたまふころな  
れとおまへにてはをされたまふ  
わろしかなにかすならぬ  
しもへともなとたにこの院に  
まいるには心つかひことなりけり  
ましてわかやかなるかんた  
ちめなとはおもふこ、ろなとも

〔源氏物語大成〕七六九頁⑥〜⑩



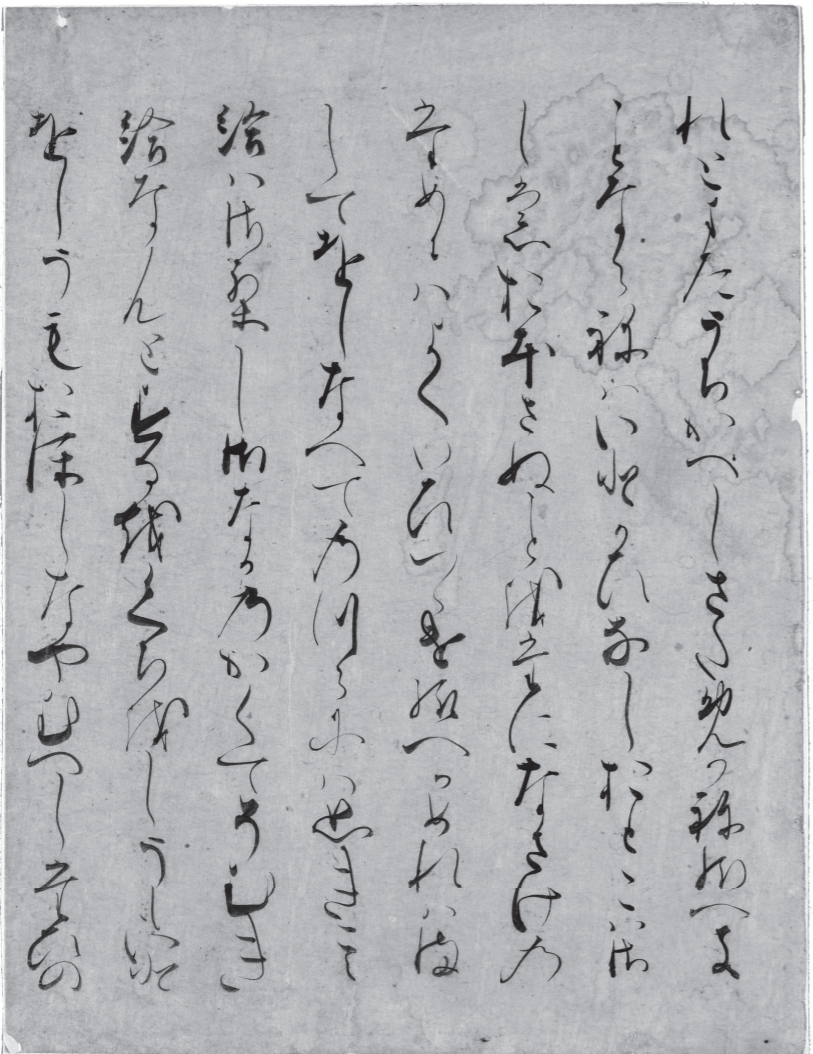
8 後光厳天皇 六半切(若紫)

もとは六半形の冊子本で、大きさは、縦一六・三センチ、横一五・三センチで、一面一〇行書き。  
内容は、若紫の巻、尼君の忌明けに邸を訪れた源氏が、紫の君の乳母である少納言に語った言葉である。  
当該断簡は、伝称筆者を後光厳天皇とするが、ツレの断簡は『古筆学大成』に「伝後伏見天皇筆 源氏物語切(二)」として二葉掲載される。そのうち一葉が国宝大手鑑(陽明文庫蔵)に収められており、近衛家熙によって後伏見天皇筆と鑑定されているからである。書写年代は『古筆学大成』解説でも「十四世紀半ば」とするよう、南北朝と推定される。時代相応な伝称筆者は後光厳天皇だと言えるだろう。

ツレの断簡を合わせ考察すると、本文は定家本系統、中でも池田本や三条西家本に比較的近い。  
(中葉)

いとむけにちこならぬよはひの  
またはかくしう人のおもむきをもみ  
しり給はずなからなる御ほとにて  
あまたものし給なる中のあなつらは  
しき人にてやましり給はんなどすき  
給ぬるもよと、もにおほしなけき  
つるもしるきことおほく待にかたし  
けなきなきの御ことは、のちの御心  
もたとりきこへさすいとうれし  
うおもひたまへられぬへきおりふし

〔源氏物語大成〕一八一頁①⑥



9 後光厳天皇 六半切(賢木)

縦一七・五センチ、横一三・四センチ。断簡の現状は八行だが、左端二行ほど切られているか。もと六半形の冊子であったかと推測するが、『古筆学大成』にも類似する切がなく、今のところツレが確認できていない。字高は約一四・八センチ。特に右上の部分に湿損がある。

内容は、賢木の巻、源氏からの手紙に六条御息所は激しく動揺するが、源氏自身もこの期に及んで心惹かれる思いにとらわれている、という場面である。仮名・漢字の表記の差を除き、定家本の本文と異同がない。(横井)

れとまたうちかへしきためかね給へき  
ことならねはいとかひなしおとこはさ  
しもおほさぬことをたになさけの  
ためにはよくいひつ、け給へかめればま  
してをしなへてのつらには思きこえ  
給はさりし御なかのかくてそむき  
給なんとするをくちをしようもいと  
をしようもおほしなやむへしたひの

〔源氏物語大成〕三三八頁③⑥